生徒の魂を揺さぶり続ける
海外との交流を機に自信を持たせる

日本福祉大学　影戸誠教授（前・西陵商業高等学校）

＜プロジェクト以前＞

平成4、5年ごろに、名古屋市立西陵商業高校に「国際コミュニケーション学科」が設立されました。そこで、異文化に着目し、当時では珍しかった電子メールを使って中国や米国の生徒などと交流を行っていました。しかし、この交流を通じてますます「学びを教室の中だけでいくら行っても、生徒は海外で通用するような人間にはなれない」、「教室の中の授業だけでは生徒の魂を揺さぶることはできない」と感じるようになりました。ICTによって「教室の中に外部の風を当てること」が生徒の学習意欲を高め、変革への第一歩になると痛感していたのです。

実践の経過、教訓

海外の高校生を日本に招く

100校プロジェクトが開始され、様々なプロジェクトに参加しましたが、印象に残っているのは8年度からはじめた「アジア高校生インターネット交流プロジェクト」です。初年度は、日本大使館の協力も得ながら、ネパールと交流を行いました。現地にコンピュータを持ち込んで環境を整えた後、電子メールによる交換などを行いました。また、実際にネパールの高校生と教員を日本に招き、国内数か所で交流会を持つことも行いました。

翌年はタイ、韓国へと活動範囲を広げ、教科書問題、慰安婦問題などの事件があってもそれを議題にするなど、活発な活動を行いました。

このプロジェクトは5年間の活動後、現在も続く、「ワールドユースミーティング」に発展しています（囲み欄参照）。これは11年度から始まり、毎年夏に開催されているイベントです。インターネットを使って世界各国の高校生・大学生と事前の連絡をとり、開催当日は福祉や環境をテーマに英語によるプレゼンテーションを行っています。ドイツやアメリカ、韓国、台湾、オーストラリア、シンガポール、ジンバブエ、パプアニューギニアなどから高校生を中心に350名ぐらいが参加し、ホームスティなども体験。国際的コラボレーションとして共同プレゼンテーションなども行っています。

元気になった生徒たち

10年ほど前に文部省（現・文部科学省）が、「個を大切に」など生徒の個性を伸ばすことを教育目標にするようになりましたが、笛吹けど踊らずというか、学校現場はなかなか変わらないという状況がありました。しかし、西陵商業高校にネットワーク設備が入り、一人一人に適切な課題を与え、外とのキャ

ワールドユースミーティング

平成11年度以降、毎年夏に開催されているイベント。米国、ドイツ、アジア各国などからも高校生が参加。事前交流として電子メール、Cu-SeeMeなどのインターネットの機能を利用して連絡を取り合い、テーマを決定しアンケート調査や当日のプレゼンテーションで必要なデータを自国で収集して参加する。

当日のプレゼンテーションでは、インタラクティブ性が重視される。会場の聴衆とのインタラクティブ性、ダンスを試みるもの、クイズを試みるものなど、ともに「笑顔」を作り出す時間となる。

英語での自己紹介や、全生徒がデジタルカメラを持って市内に出かけ、ホームページにまとめるといった共同作業を行うこともあった。

また、テレビ会議による遠隔地とのリアルタイムセッションや、参加者同士が意見交換ができるポスターセッションも行われたりする。

もちろん、教員用、生徒用、英語版など各種のメーリングリストが裏で活躍している。

http://www.japannet.gr.jp/w2003/

ッチボールがはじまると、「自分の責任でものを言う」、「主体的に動く」といった面で生徒たちに変化が見られるようになりました。生徒たちは「自分はできるんだ」という自信を持ち、また自分を育てるのは自分自身であるとの認識が芽生えたように思います。

そして、交流校や交流相手の生徒、あるいは西陵商業高校を見学に訪れる人たち（多い年には年間300人以上が訪問）から注目されると、生徒たちは元気になりました。さらに、ICTで電子データとして記録された内容を時系列にたどることで、生徒の足跡を振り返ることができ、「生徒の育ちをコンピュータが見せてくれた」と言えます。

ワールドユースミーティングで

また、どの学校にもある程度共通することだと思いますが、エネルギーがあり、ルーズソックスや化粧に走っている女子生徒たちがいました。その中に、英検準2級に合格しているものの、学校の授業方法、英文法・リーディングは全く駄目という生徒がいました。しかし、この生徒は私の授業実践がきっかけになって英語の勉強を頑張り、オーストラリアに留学しました。生徒のエネルギーの向かう先をうまく誘導してあげれば、生徒はどこまでも伸びるものだということを実感しています。

課題は「パブリックスピーキング」

私自身にとっての効果という点では、ネットワークの普及が世界同時進行であったことが奏効し、「世界の教育者と一緒になって考えることができた」という点が最も印象的です。

課題としては、「パブリックスピーキング」の問題があります。多くの聴衆を前にしていかに効果的に伝えるか、いかに少ない言葉できちんと伝えられるかという点です。様々な形で取り組み、実践した生徒には改善が見られましたが、日本全体としては今もって解決されていない大きな課題であると言えます。

10年間を振り返って

「生徒に自信をつける」がICT活用の原動力

私がICTを活用した実践を続けることができたのは、次のような要因が重要であったと思います。

第1は、「生徒に自信をつけさせたい」という思いです。国際交流のプロジェクトを経験することで、実践的な英語力、人前できちんと話せてプレゼンテーションできる能力を身につけさせ、生徒を自信を持って社会に送り出したいという思いがありました。第2は、「校長先生の理解」です。西陵商業高校時代は最低と、最高の校長先生に巡り会えました。ある校長先生は、私が東京のシンポジウムで発表するときに、3月の卒業認定で多忙な時期にもかかわらずわざわざ見に来てくださり、大学の先生方にもきちんと挨拶してくださいました。片方の校長はなにもしないことばかりを願っていました。第3は、「先生方との出会い」です。100校プロジェクトに参加された先生方は、野武士的な人が多かったように思います。「教育を変えるんだ」という意気込み、「分からなければ自分で勉強する」というスタンスの方が多かったように思います。また、授業がうまくいかない場合でも、生徒のせいにするのではなく、「指導方法の改善によって何とかなる」、「生徒には力はある」という発想の方が多く、随分教えられました。

＜成功の秘訣＞

実践を成功に導くポイントについて、いくつか上げたいと思います。

第1は、ICTを活用した授業実践を考えている先生と、その周りの人との「連携」が重要だと思います。過去を見ても、学校外との連携、リソース（資源）を持っている人は伸びています。逆に、連携することなく個人で頑張っていた人たちは、途中で止めてしまっている場合が多いようです。ただし、恩を受けてばかりは駄目ですので、返せるときは返すようにしています。

第２は、管理職や同僚の理解を得ることです。例えば、私はテレビ会議で交流相手先とのやりとりをする際に、冒頭で校長先生に挨拶してもらいました。こうした機会を設け、管理職の方に実際にネットワークを体験していただくわけです。また、同僚の先生方の理解を得るために、校内研修もよく実施し、ある先生の自宅に行ってISDNを設定するといったことも行いました。